

I-12 当科での Stage3A 期肺癌に対する治療成績

速藤 俊輔¹・斎藤 紀子¹・大谷 真一¹・金井 義彦¹・
山本 真一¹・手塚 憲志¹・長谷川 剛¹・佐藤 幸夫¹
塚田 博¹・村山 史雄²・蘇原 泰則¹

¹ 自治医科大学外科呼吸器外科；² 国際医療福祉大学外科

当科での Stage3A 期肺癌に対する治療成績（目的）当科で治癒切除を行った病理病期 3A 期肺癌症例を臨床病期・術前加療の有無・リンパ節郭清度・組織型・転移した縦隔リンパ節の領域数別に生存曲線を求め、3A 期肺癌に対する治療戦略を考案した。（対象）1990～1999 年の 10 年間に根治切除を施行した病理病期 3A 期非小細胞肺癌 85 症例で男性 64 例、女性 21 例、平均年齢 64 歳を対象とした。臨床病期は 1 期 36 例、2 期 8 例、3 期 41 例。プラチナ系抗癌剤を主体とする術前加療は 20 例に施行した。リンパ節郭清は 2 群郭清 66 例、3 群郭清 19 例で組織型は腺癌 38 例、扁平上皮癌 39 例、大細胞癌 8 例であった。転移縦隔リンパ節の領域数は 1 領域以下が 49 例、2 領域以上が 36 例であった。（方法）Kaplan-Meier 法にて各因子別の生存曲線を求め、Logrank 検定にて解析した。（結果）全症例の 5 生率は 43% で、臨床病期別には 1 期 44%・2 期 75%・3 期 28% であった。術前加療を施行した症例の 5 生率は 49% で施行していない症例の 42% と比較し良好で、また縦隔リンパ節の単一領域に転移を認めた症例は 50% で複数領域症例の 35% に比べ良好であったがどちらも統計学的に有意差は見られなかった。郭清度・組織型によって生存率に差は見られなかった。（結語）3A 期肺癌治療成績の向上のためには個別化した治療戦略が望まれる。